

基盤共同研究 海域・海村の景観史に関する総合的研究

期間：2015年～

[所員] 安室 知 内田青蔵 大川 啓 小熊 誠 木下直之 昆 政明 佐野賢治
後田多敦 周 星 須崎文代 角南聡一郎 関口博巨 泉水英計 高城 玲
平井 誠 廣田律子 前田禎彦 丸山泰明 山本志乃

[客員研究員] 橋村 修 橋本道範 松田陸彦

[研究協力者] 太田原潤 小野寺佑紀（歴史民俗資料学研究所博士後期課程）

2020年度 活動報告

安室 知

[研究目的]

本研究所はその発足の早い段階から漁業制度資料等による海域・海民史の研究に取り組み、これまでも能登半島や瀬戸内海の二神島といった地域で多くの研究蓄積をなしてきた。また近年は、国際常民文化研究機構のもと「海域・海民史の総合的研究」として3つの共同研究がおこなわれた。本共同研究はそうした研究蓄積を継承し発展させるものとして位置づけられる。

海は水産物だけでなくさまざまな資源を生み出す。そして、その開発・利用に当たっては、人・物・情報の行き来を促し、そうした営みを通して社会知や民俗知が膨大に集積される空間となっている。反面、負の記憶として、海域の利用をめぐるのは、個人や村のレベルから国際的な問題までさまざまな対立や紛争を生んできたし、また海という大自然とたえず対峙する海村では大きな災害や事故が歴史的に繰り返されてきた。そうした海域海村の歴史文化について、絵図として残された景観を手がかりに、本研究所の人的資源を活用し学際的に研究することが本共同研究の主な目的となる。

[2020年度までの主な活動]

2020年度は成果発表の機会として常民文化研究講座を開催した。ただし、通常の研究活動となる共同研究会や共同調査はコロナ禍のためおこなわれなかった。

本共同研究では、2015年度以来これまで共同調査および共同研究会（通称、漁場図研究会）を開催してきた。共同調査としては、2015年、2016年の2カ年にわたって、大島（気仙沼市）において聞き取りを中心とした民俗調査および大島漁協文書等の調査をおこなった。また、漁場図研究会は、計8回おこなっており、2017年には中央水産研究所と共同で開催している。このほか、漁業制度調査資料に付属する漁場図の整理を並行しておこなっており、2018、19年度には漁場図翻刻プロジェクトを立ち上げた。

また、研究成果の報告機会として、これまで常民文化研究講座を2015年（第19回）と2020年（第24回）の2回にわたり開催している。それぞれ発表タイトルは以下の通りである。なお、この常民文化研究講座の報告内容は、常民研が編集する『歴史と民俗』33号（2017年2月刊行）および

同 38 号（2022 年 2 月刊行予定）において公開している。

○第 19 回 常民文化研究講座

「『漁場図』を読む」（2015 年 12 月 5 日）

1. 「なぜ『漁場図』は残ったか——常民研所蔵資料から」
窪田涼子・越智信也（常民研）
2. 「松江藩・鳥根県の『漁場図』情報を読み解く——歴史学からのアプローチ」
伊藤康宏（鳥根大学）
3. 「近世・明治期の漁場図、沿岸絵図にみる景観表現——歴史地理学からのアプローチ——」
橋村修（東京学芸大学）
4. 「漁場図の活用と可能性——地理学からのアプローチ」
横山貴史（立正大学）
5. 「ヤマアテと漁場図——民俗学からのアプローチ」安室知（常民研）



写真 1 瀬戸内海魚礁設置計画図



写真 2 鳥羽浦鰯桶大漁事之図

○第 24 回 常民文化研究講座

「景観の総合資料学——「漁場図」を読む 2」（2020 年 12 月 12 日）

1. 「石丁場——技術の進歩と景観の変化」松田陸彦（国立歴史民俗博物館）
2. 「北山林業と民家の庭——京都市中川地区における文化的景観調査から」
恵谷浩子（奈良文化財研究所）
3. 「消費から漁撈を考える——琵琶湖のフナズシをめぐって」
橋本道範（滋賀県立琵琶湖博物館）
4. 「エリの造形と分布——「鰯税取調帳」から読む歴史」
安室 知（常民研）

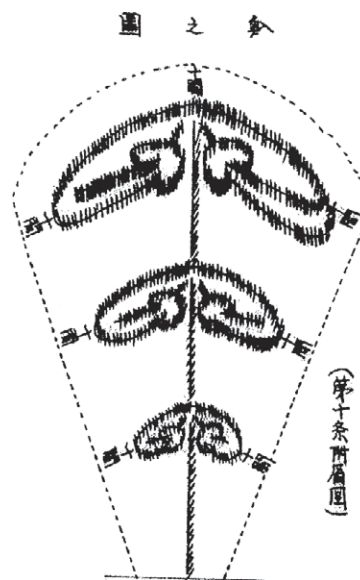


写真 3 エリ

■ 2020 年度の活動

- 第 24 回 常民文化研究講座「景観の総合資料学——漁場図を読む 2」2020 年 12 月 12 日 オンライン開催 安室知・松田陸彦・恵谷浩子・橋本道範